

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2026. 1



令和8年1月1日発行(毎月1回1日発行)第74巻第1号

No.812

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の解愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い發生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまだ北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二六年 一月号 (通巻八二二号)

◇今月の二十首詠……地球儀廻す

関根榮子 2

作品

牧雄彦・松本多摩子他 4

A 松野正子他 18

B 丸山哲史他 44

C 関野春美他 56

A 金近敦子他 68

■オリープ集 山合邦子・山元富貴他 36

◇今月の二人 大録麗子・中村靖子 14

私と短歌との出会い (281) 土井谷恭子 17

■若松喜子歌集『車椅子のうた』批評 藤田美智子 28

幸せのかたち 光広祥子

うたえる喜び

■〈第一歌集を読む〉34 高尾恭子 32

檜垣美保子歌集『ジルコンの塔』

——十五階の浮遊感——

■遊覧寄港〈私の推しメン〉 杉浦詩子 42

歌壇月旦

『をとめよ素晴らしき人生を得よ』『女人短歌』の時代

西堤啓子

十一月号作品批評

60

A……関根和美・石田明彦

伊東ミイ子・西畑睦子

B……佐藤光正・三浦美代子

C……高橋啓子

オリープ集……坂上直美

十首選 松本多摩子・紺野紘史 54

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

靖子のへなちょこ指南 滝田靖子 53

報告・若松喜子歌集『車椅子のうた』出版お祝い会 深山嘉代子 55

最近の歌誌より (編集部・藤田) 79

第72回地中海全国大会(東京大会)のご案内 80

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

43

地球儀廻す

関根 榮子

しばらくは見惚れていたる茜雲やがて黄金こがねを刷きて薄れし

秋まだき椿にはやも蕾あり混み合う枝を切る手戸惑う

いつの日か訪ねたき秘境の無人駅時おり手にする地図も古びて

郵便や夕刊のなき土曜日もポストをたしかめに行く癖いまだ

久々に駅前カフェのモーニング、スマホ手にせぬはわれ一人のみ

この角を曲がれば見事な菊咲かす家あると言う車椅子の夫

大鉢の菊花並びてそういえば九月は「菊月」の別名ありし

家々の季節の庭を楽しみにゆっくり夫の車椅子押す

一九三七年生まれ

埼玉支社長

歌集『風いくたび』『虹の時間』他五冊

現代歌人協会会員

テレビには豪華客船入港す乗るはずだった船かもしれぬ

船旅の世界一周を企画せしあの日のように地球儀廻す

もう少し大きな方が見やすいと夫は素気なく地球儀見ていし

デイケアに夫の行きたり昼食の白飯しろいにハリハリ焼海苔くたく

新聞に紫の染み付けながらブルーベリーをつまみつつ読む

階段のロールカーテンするすると上げれば朝日の思わぬ鋭さ

白水しろみづと言いたる米の研ぎ汁じを思いつつ今は無洗米なり

溜まりいし家事のようやく片付きて入念にいれるドリップコーヒー

手続きはまだ日があると後廻し事務処理苦手のわれの癖なり

貴金属の値上がりやまた買い取りと世界に戦のあれば続きて

政局の混乱を経て史上初の女性総理に期待するは何か

AIで作る短歌の如何ならん推敲とうは無用になるや

作品 A

牧 雄彦

黄金の日々

・大

イヴ・モンタン、エディット・ピアフの歌声に胸熱くせし若き日ありき
六十五年の月日は過ぎぬシャンソンを聴きに通ひしカフェは失せて
思ひ出の尽きぬシャンソン喫茶なり火事がなべてを燃やし尽くしき
学生時代通ひつめたるもう一軒 四条木屋町今も変はらず
看板は昔のままなりひつそりと小路にありてドアを開けたり
オーナーもウエイトレスもみな変はり煙草の匂ひはるかなるかな
親友と時を忘れて語り合ふ思ひ返せば黄金の日々

松本多摩子

太鼓の音

・桜

日曜は遠く近くに太鼓の音さぬきの秋は近くにありて
頼られて子らの見守り七回目行けばどうにか一日つとまる
老いたれば吾の手を引く孫ありて幼き日にはつないだ手と手
暑い夏耐えに耐えきてようやくに小さい秋の大きな感動
三世代並んで見上げる大花火大雨の中これまた四人で
年末にカナダへ行くという孫は連休に友とわが家で遊ぶ
骨折の友を助ける二年生誰もが友を思いやる場に

三浦好博

あぁ非国民

・鮎

散る時に花は散りたり人の死を聞かされ少しだけは驚く
「痛み」をば伝へる術は無きものか人の痛みを吾も知らざりき
夕顔の主張なき香に包まるる昨日は四十個今日は五十個
缶ビールとゴーヤの茹で汁飲み比べどちらも甘いと云ひて笑はれ
女性なら誰でも良いとはいかぬのだ我らを何処へハロウィーンの魔女
お勧めの情報そして共感を求めるネット揺らぐよファクト
戦争は究極の「日本人ファースト」ぞ背ける我のあぁ非国民

三木まり

刻

・昂

糸トシボのコバルトブルーの翅模様 今朝の風は高く澄んでる
身の丈を越えて揺れる紫苑なら明日の空が見えるだろうか
ちちははを共に喪うかの秋の空蟬はいまも本棚にあり
かの秋の蟬の抜け殻かさこそと軽く静かな音を立てる
海に向くベンチがひとつその海でいのちを落とす人の名刻まれ
人の名の刻まれたベンチ夕暮れの渚にひとつ背当て錆びゆく
錆びてゆくベンチの背に人の名が陽を浴びている夕の潮風

宮本靖彦

あかね雲

・凌

いそいそと紅スカートの女性吾を抜く昔は快步威張りし我を
 楽しめし最後の万博終る日の花火華やかテレビにあふる
 永年の老父施設に行き四年家訪めれば家族は転居
 さはやかに雲散り暮れゆく秋の空株僅にこだはる吾を笑ふらむ
 得点ルール教はり初の輪投げ会我が投ぐる輪は棒に嫁はる
 あかね雲かつき暮れゆく山見つつトランペットとふ大花に会ふ
 故障せしエアコン買ひしは十年前卒寿我等の元氣喜ぶ

三好聖三

蜻蛉

・伊

友婦寂十月のなかばを過ぎて大店の主の役を降りてゆきたり
 清順のオールナイトに行こうせと誘いに来たのは夏の夜のこと
 この町に映画館があるころに誘いにきたのも彼氏であった
 病んでなお煙草を捨てぬしやうもない夫なんだと笑いつつ言ふ
 あまた舞う猩々蜻蛉のなかにして一頭赤き蜻蛉が飛ぶ
 北の柿北東の梨たまわりて夜の飯に添えたり
 きんつばを買うため左折右折して網代駅よこ間瀬菓子舗まで

御代田澄江

母のひとこと

・茨

香淳皇后の御著に触るる今朝の新聞みて思ひ出づ母の一言
 「みなもの ごくらう」とのお言葉ありしと婦人会の皇居への勤勞奉仕
 皇居への勤勞奉仕仕事終へし時のお言葉母は真似しぬ
 一同は平伏し御顔は拝せずも御声は通り麗しかりしと
 「貴女に譲るわ」電話のありて荷も届く香川師の墨蹟なれば驚く
 吾も買ひ時経て紛るる歌友より届きし墨蹟大切にせむ
 百日紅剪定深く今期は咲くまいと庭師言へれど今咲き誇る

もとむらしげと

鳥威し

・そ

秋日さす山を背後に立ちならぶ家々の壁白くかがやく
 実り近き稲田にきらり翻る鳥威しの紐の銀のきらめき
 わが庭に繁れる草の中にして黄の花点描のごとくに咲けり
 夕立に濡れしき庭にいでゆけば西空に虹淡くかかれり
 遮蔽壁切れてつかのま車窓より遠山脈のうえの白雲
 人の踏まぬ所あるらし校庭に芝生の緑点々と残る
 木々の影濃きをゆきつつひとところ光とどきて光が踊る

桃原佳子

秋めく

・沖

金木犀こぼるるばかりに咲きおれば老いの暮らしも心潤う
 終わる花咲き出する花庭隅に慎ましく今日も日目草咲く
 待望の目と夜中に日の覚めぬ野菜に朝夕水撒きし日々
 緑濃き金柑艶めく雨上り早に落ちし青実数える
 力ずく土手の芽を引き抜けはおんぶバッタがびよんと飛び出す
 黒揚羽庭に現れ一巡りし秋めく風に乗りにて去りゆく
 急速に車の往來増す夕べ五時を知らせる音楽聞こゆ

山下雅子

霜月

・習

雨上がりのうす日さし入る窓の辺に木々は色付き霜月に入る
 庭におく紫萼 紫は戦時食昭和の緑と雑草ならす
 この一年病まず転ばず生きたりと篤き介護の尊さを知る
 「インフルは増加しつつ冬に入る」注意促すドクターの声
 思わざる九十五年の寿命得て総領の甚六われの日々あり
 動きとろくうっかり多きこの日頃思うのみにて終るが辛し
 成し得ぬを抱えて今日も暮れてゆく釣瓶落しのこの呆気なさ

山 野 幸 司 学 校

・ 沖

学校の小屋に生れたる子ウサギを互に抱きし子らの夕暮れ
当番の子がやさし気に抱く卵解ることなき冬の陽の中
エサをやる子の影やさしゆらゆらと声にぎやかに一日の終わる
子どもらの声ばたつと消えた朝退職という鳥の声する
今日からは出勤のなき日々流る心は天に我抱き締むる
今日埋める仕事は外に田や畑緑の草にわれは寝転ぶ
出勤の君を見送り一人居の部屋に音なき姿を求む

山 本 孟 土 俵 上

・ 大

竹箒土俵の土をていねいに足跡消して力士を迎ふ
砂かぶり巨体の落ちきて重なりぬ肋骨一本折れて助かる
土俵の土つけて花道下がりゆく大銀杏乱れ汗に照る肌
土俵上、呼出・行司の声徹る力士無言に回しを叩く
突貫し土俵を割りてくやし顔体をおこし天井あふく
ひいき力士の勝ちを念ずる土俵上 満員の客の暗燃え立つ
土俵溜り力士巨体の無表情土俵に注ぐ眼の怪しきを

養 学 登 志 子 秋 の 翳

・ 凌

音がする何の音かはコツコツと杖つく秋の翳かもしれぬ
電話の音二度と見られぬ夢打ち消し「も一度寝ね見よ」むなしきいかり
お隣の庭が更地にかわる時伐られる樹々の悲鳴を聞いた
樹々それぞれ伐り倒されるくやしきの樹液をこぼす涙のかたちの
透明な糸一本を支えとし動かぬ蛹の中のぞきたきに
蝶となるための蛹のいとなみは計り知れない神秘の世かも
言葉にはなるやならずやみゆうみゆうと目を見ればわかる猫の言うこと

横 田 敏 子 お 別 れ

・ 福

お別れはいつも突然に訪れぬ おくやみ欄の「三田享子」さん
折々に元氣かしらと氣にしつつ会いに行く日を延ばしておりて
「享子さん会いに行かずにごめんない」掛ける言葉が見つかりません
「眠るような最後でした」と伺いぬ この安らかな三田さんのお顔は
ご家族を愛し愛されし三田さんのお歌はいつも温かかりし
「地中海」を楽しみに待っておりしとう家族の次に大切だった「地中海」
ありし日の三田さんの笑顔を胸に秘む どうぞ安らかに眠り下さい

市 原 や よ び 新 記 録

・ 萬

紅さすはいつの日以来か紅さして孫・子の待てる祝の席に
主役なる我に戸惑い受けている孫よりの花東拍手の中に
もう一人のばあちゃんかきつと演じてる金の帽子にちゃんちゃんこ着て
満員の国立競技場静まりて棒高跳の最終演技
長き棒大きく握り人が跳ぶ夜空に高きバーを越えたり
総立ちの観客の拍手鳴りやまず新記録生れし夜の競技場
新聞が新聞でない音立てる補聴器新人初日の耳に

磯 田 ひ さ 子 鈴

・ 森

巡礼の歩みにまかす鈴ならず熊よけの鈴平地にひびく
アスパラののはははの葉がため込んだ光が地中の根を太くする
厳しかりし暑さをくぐりほの白く季に遅れて夕顔の咲く
夫逝きて二年の秋うるみたる後の月こそ身に沁み透る
阿久津家より香川家を経て夕暮の二幅一對の掛軸下げる
らつきようと太ねきのうた夕暮の軸ぼつぽつと簡素なる筆
意を殺し過ごせば腹にすゑかねること二つ三つあるをよろこぶ

梅本武義

蜃

・羊

薄闇に蜃と直感打ち殺すわが家への坂我で良かった
地蔵尊拜みし後にに出合う蜃殺生するを御蔭と思う
殺したる周囲の雑草刈り払う蜃は番で居るの伝えに
獲物にて捕殺を常としていたる古^{ふる}人を熊は恐れし
十ヶ月過ぎ民に掛かりし猪の暴れ足掻きし跡が自然に
菜園の防御の柵に実を下げて南瓜は期待を越えて応える
わが庭を今宵占めるはチンチロリンチンチリンと茶化すも多く

大浪美雪

物語

・森

物語の始まりのやうな草の名はひめむかしよもぎはじまりはじまり
《神立祭》神が出雲へ発つ日とか長月尽の空の混みやう
蔵出しの神輿めがけておひねりはつづての如くつきつぎと飛ぶ
棚引ける雲を透かして見ゆる月薄くれなるの暈かかりたり
乱視なる目にはさやかに見えねども月は上より欠け始めたり
屋根瓦ぬらしし月の光失せて皆既なしたる赤黒き月
芙蓉のわき薄紫のしをん揺れ秋の花野の色を見せたり

奥田陽子

花の波

・羊

年年のコスモスの海泳ぐがにそここに人の頭を見せながら
しばらくをコスモスの海に沈みいん立ちたる時を吸う息大きく
波立ちて揺れ揺れている花の海大波 歓声きらめく秋日
にぎわいはコスモス任せしずもれる池に鴨らの羽をひろげて
共にありし日と異なるとわずかなる差異も伝えんピラカンス朱し
花植えん喜びはただ人の為そのいちにんの姿を知らず
人の世の塵は入れまじ一日を水に遊びし眼は宵に閉ず

神田鈴子

秋

・大

うとみろし猛暑もやに影ひそめウオーキングに風が誘ふ
やうやう秋の雲流れ日を浴びて実れる柿が輝きを増す
戦ひの地にも光を届けるむ皓々と照る中秋の月
原口の引退セレモニーに立ち並ぶナインの目にもあふれ来るもの
万来の拍手に応へ場内を歩む原口の足どり軽し
今年また柿と新米送り来ぬ縁遠き人の変らぬ温もり
思考力、記憶力さへ衰ふを負けじと今日も足を踏ん張る

上林節江

右往左往

・湾

夜の明けを待ちがてに鳴く蟬の声潮のごときを年間かず
雨ふらず地表かたく出てこれぬ今年の夏とぞ蟬また受難
熱地獄よくぞ生れてと思いつつ打ち果たしたりイエカ一匹
美容院いでてたそがれ竜巻にまかれるごとく浴びる虫の音
ひがん花炎のごとき季は過ぎ金木犀の誇らかな街
駅前の鯛焼き店の長い列季節えらばぬ若きらの影
つむじ風吹きぬけること季速く落ちこぼれつつ右往左往す

菊地栄子

この世はどこも

・海

浅漬けを天日に干して酢漬ける胡瓜のカリカリ喜びて食む
浮雲の白さよ青き空の色われに一時ときめききざす
立ち上がり部屋を移れど何せんと立ちきしわれかしは佇む
本音をば時には言おう朝々をバリッと乾くタオルいままし
チューブから押し出されたやうな車の列北環状線の午後の憂うつ
貧と孤独待ち受けている文庫本の一茶の暮らし 秋に入りゆく
昼顔のひとつ占める蟻の群れこの世はどこも生きづらきなり

河野繁子

散歩

・雁

A-Iは遠くにあると思ひしに辞書になき語をスマホに見つく
山映の一人の生活にA-Iのひたひた寄せるうつつに気づく
稲うれて買い取り去年の二倍とか立ち語る明るき人と
神無月花なき水辺を賑わせるシラネセンキウ杖つく散歩
水辺なるシラネセンキウ咲く白きアサギマダラよと行く途中
喜多流の能舞台ある別荘の松の本数えし幼子の日に
すり足で出で来しシテの歩を止める舞台の顔はわからず覚める

小林能子

風知草

・羊

アルバムにルーベすべらせ秋の茶を染しむかタイより里帰りの友
手のすきに草を引きしが風知草のゆれて逞しき株のひろがり
報告書に日本とソウル ホーチミン バンコクを繋ぎ漂泊の日々
正月の稼ぎに象と象使ひ森を出てバンコクまでの長旅
元旦を王宮広場に托鉢の僧の列しづかにほぐれてゆきぬ
だいぢやうぶ来年もまた来るからと友はドアの外に声を残して
リハビリの仲間それぞれに潔し むかしは昔いまはこの今

近藤栄昭

必然

・虹

健やかと知らせる信号コツコツとどこかの壁に釘を打つ音
繰り返し読み若返るヒーローに老いて読む本泳いで走って
カツカツと定時知らせるパンブスカ積建て長屋夜の足音
転ばぬと掴んだ椅子の背もたれは誰かの肩の細い骨組み
咲き始め梅一輪は早咲きに霜枯れもみえひと枝の曼荼羅
引き出しに指輪に紛う指貫か金色の遺品箱の小箱に
今までは必然の事こよりはみんな偶然責任がある

近藤芳仙

私のサンマルコ

・信

別所街道ゆけばひだり手「サンマルコ」 イタリア国旗はためきてをり
木製の階段を踏みあけるドア スパイシーな香といつもの夫婦
つまれたる皿の向かうの調理場に白衣のシェフが無口なうごく
赤きタイ赤きリボンのお二人が生み出す料理 舌に馴染みて
半世紀ちかくつづきし店の味ローマに食みしピザ・スパゲティ
長年の店を閉つとふ張り紙のバソコンの文字紙面を埋める
きまぐれに通ひし店に二十年 齢八十を吾も越えたり

坂上直美

秋

・天

涼風の吹きこむ午後のソファに座し本開けしまましばしまどろむ
気がつけば同じ頁を繰り返す古今和歌集秋上の巻
秋の夜に気心知れた友と呑む清酒「立山」 歯にしみとおる
彼岸花 狐の刺刀 曼珠沙華 狐の提灯 狐の簪
年経たる狐の使う簪は白曼珠沙華 紅より艶に
狐らが野辺に集いて祝うらし今年豊作 曼珠沙華咲く
ふと出でてやがて消えゆくわが歌のはかなかりしよ秋風に散る

坂出裕子

花水木

・洛

酷熱の夏なりしかど花水木 涼し気に実のみどり揺れをり
ほら秋が来たよと枝を一杯にひろげて天に赤き実かかげ
こんなにも秋は静かでやさしきか透る日差しに幸をいたたく
ふと夜半に目覚めて空に満月を仰ぐしあはせ神の恵みの
変りなき日々を送れど変りなきことこそ幸か老いゆかむ身に
何事もなき日々にして花が咲き実の成る景によるこびを得て
花水木赤き実ひとつ土の上に転べり鳥がもう来てゐるか

篠原まり子

歳月

・羊

温暖化越えて沸騰化今ははやうちわ打ち水日日を遠くして窓に見る低き空より視界なく線状降水帯の危機迫る
親仔熊射殺されたる現実をプーさん好きの孫思い遣る
食べて寝てころばぬ事と医師は言うたつたそれだけさびしさ極む
FMの深夜のラジオ聴きし人ありと知りたる蜜やかな時
大津への想いしんしんわがひと世歌に生かさされ失いしは大
大会を断念したる明け暮れに虎落笛さえ恋しきものか

柴田登志恵

天山

・天

沙漠へと入らむ太陽色朱く大きがまに見えずなりけり
つめたさに笑みこぼれくる天山の雪解け水の潤すオアシス
天山の雪解け水を走らする水路に揺るる柳さみどり
夜半もなほ暑きトルファン熱持てる大地を離れ人宙に寝る
まつ白な沙漠の涯の海青く空飛ぶさかな小さく見えし
天山の雪より白きオオカミは東の海渡ると言へり
東の海の蒼さに色を交へオオカミゆかむ補陀落浄土

鈴木結志

文字考学

・福

生きすがた四時重ねの独創に一人称の物語り生む
言の理の信頼七情われのみのその場その時の感覚に得る
表現をデザインうたに韻律の箔を加えて結句をしめる
ことの外映ゆる紅葉が言かける四季ざくら花一茶忌称う
虹うつす霧に包まれ雪村の絵の中にいる思いに至る
文字考学先人の教えくみおのが見えぬ珠玉の表現を練る
「青柿が熟柿叩う」ことわざにおのが言語をあらため思う

関根榮子

海遠し

・埼

泳ぎしはいつの日のこと海遠し浴槽に身を沈めながらに
小さな流れのほとりの芹を摘む買物帰りの中休みにて
この辺で大丈夫ですよと別れたり荷物持ちくれし若き知り人に
夕刊を取る手を休め長々と曳きゆく飛行機雲を追いたり
今日ひと日何か良きことありしかと寝ざわに思う寝付きのために
羨しみて見ており並びし走者等のスタートその一瞬美し
カメレオン成長過程の激しくて寿命は半年と知りて驚く

関根和美

二〇三・五輪

・埼

日本語に英語広東語四歳は巧みに分けて父母また友に
ブリスベン市の図書館はお気に入り日本の絵本返しては借る
爪跡のかくあらあらしサイクロンの去りて戻らぬゴールドコースト
お別れにかぶ大根をとともに蒔く夫をまねつつ小さき指もて
間引きという漢字英語をとりまてて下手な説明子の妻にする
写メールに届くひろひろ大根の料理法いかにと子に問われ「はて」
意外にも小さきブリスベン空港の生まれ変わらん二〇三・五

高尾恭子

中之島今昔

・大

上方の商都に消えた相場師の名を刻みたり石の回廊
戦いの磁場をはなれて昼どきの営業マンが河畔にねむる
土くれに魅せられ遺す同宝の天目茶碗の旅路はてなし
百年を支えた杜屋の追憶をしはし赦さん夕かけは射す
大川のよどみのうたかた夕映えに浮きつ沈みつ淀屋の關所
電飾に締めあげられて七色の光をはなつ銀杏の並木
眠らない眠れない街マンションの小さき灯りのひとつを生きる

高津砂千子

太陽

・零

繁りたる木の間をひらひら飛んでゆくアゲハチョウはもと忙しげに
もしかして体調悪しきことあらばと心細きことに傾く

真夜覚めて兆す不安におののきぬ間に見据えるものあらずんば
朝になり太陽みればこの不安消えるものかとしきりにおもふ
今はただバイオリズムの悪しきだけそう思いつつ朝を待とうか
一声を残して小鳥飛び去りぬ雲ひとつなき朝のおおぞら
時かけて出汁昆布煮てつくだににこんな日もあるひとり暮らしは

滝田靖子

風

・新

新幹線のホームに修学旅行の生徒らの沿れさんざめく朝八時
日常を離れて行ける楽しさに教師の声はただのBGM
先生の話を聞けと大声に生徒を叱る心の中で

引率の教師らずでにげんなりとしてゐる旅はこれからなのに
生徒らの去りて人気の無いホームを朝の風がただ行くばかり
さんざめくことのない日を積み重ね詰まらねえ老人になるさわたしは
さざめきの残るホームを吹き抜けて風が朝を新しくする

田土成彦

鉄櫛

・宙

安堵するゆゑ判らねどこの夏も見得し守宮の指の吸盤
蛍光灯少し遅れて点く明かり平成なかばの名残とどめて
他人事なれどうれしいノーベル賞受賞者二人穏やかに笑む
踏切の音近づきて遠ざかる大糸線溪流に沿ひてくだれば
すすぎもの四角に積み積み上げるわれの矜持と言ふほどならぬ
のほり行く鉄櫛のはて茫洋の空見るだらう蝸牛の歩み
月光の清くしあれば角二つ出して唱へよ地蔵和讃を

田土才恵

桔梗

・宙

思いやりこもこもみせて老いつける熱暑ようやく越え来たりなば
曼珠沙華はなどきとうに過ぎて咲く忘れ去られし期待のように
夕光のあわき明かりに少年のボール蹴る音地を這いてゆく
そっと出す湯飲み茶碗の置く位置も定まり夕餉の静かに終わる
言葉数少ない日々の夕餉終えなお聞かなり二人というは
冬支度いまだ及ばぬ部屋ぬちをふらりふらりと蚊のさまよえる
桔梗は白とむらさき咲き分けて猛暑の夏を清しく終えぬ

玉井綾子

未来

・羊

Xのトレンドワードに出たからと引きこもりの子が仰ぐ月蝕
朝ドラの『ばけけ』歌のコーラスを開始二日でハミングしおり
出社中母転倒の知らせありそのままひと駅乗り引き返す
「カシチョウサ、カイセンあり」と救急の隊員の言葉カナでメモする
三時過ぎストレッチャーでおにぎりを食みつ母は運ばれてゆく
大腿骨転子部骨折で母含め八人入院する三連休
入院の保険に入っていなかった母は未来を抱かぬままに

中島央子

支援「二」

・森

過ぎゆける一世短く長くして桜花咲く時をひたすらに待つ
退院の車に走る環状七号を彩るつつし目に充つる
遠見ゆる残雪光る富士山頂極めは通か八十年前
夕鵜一羽とび立つ川向かうスカイツリーの尖塔点る
庭先を埋めて咲ける紫陽花は娘が丹精の「隅田の花火」
計画も予定も無き日々届きたる流行先頭のファッション雑誌
要支援「一」の認定受けし日の茜の美しき遅秋の空

永田進一

ノール賞

・山

自民党ショートケーキに蔭置く 高市早苗氏総裁就任
海ほたる調査二十年建設十年 東京湾に地底トンネル
ノール賞受賞の坂口志文氏と北川進氏ともに関西勢なり
わが庭に杜鵑草の花咲き出でて面影浮かぶ在りし日の君
塀越しに芙蓉の花の咲き盛る旧制寮歌の懐かしきかな
新米は高値更新とう無惨なり都市住民のわれら術なく
歌会に自治会長も訪れて差し入れの菓子を煩張る笑顔

永塚節子

繋ぐ

・銀

指さきのラベンダーの香を確かめつつ酷暑の夏を振りかえりみる
なす事なき時をさみしき卓上に季節外れのラベンダー飾る
夕日見つ送りくれば時差あれば夜半の三時にメールの届く
送られしメール添付のうつしえの友のかたえに仰ぐモンブラン
つながりは何も無けれどツヴァイクの逝きたる年に生まれたる我
人知れず逝きたる友の戒名を墓誌になぞる うらばんえ
いくたりもの人の上り下りするエレベーターのボタンの孤独

仲西正子

メースB遺構

・沖

再びの甲子園の優勝旗たかき夏空映ゆる紅
甲子園の土は海へと捨てられし復帰の前は御高配なく
西の海へ向きて八基のメースBボタン押されず遺構のままに
八基並むメースBの発射口遺構の上に立つ平和像
これからのミサイル発射のボタン押し顔無しA一か騒ぐなよ海
肌の色ちがえど人ら集いて空手のパレード平和の拳
琉球は武器もため邦ガジュマルは石を抱きて語りて来しが

中村博子

遠き日

・渚

横たわり遠き日のこと想い出す奈良女子大へ行くはずのこと
父親のひと言女は大学へ行く必要なしショック受けし日
忘却の彼方にありしわが受験六十余年経て思い出す
猛暑過ぎ漸く秋の風そよぎ奈良を訪ねん思いは募る
何故に今更訪ね行きたきか判らぬままに構内歩きたし
奈良女子大歩ける内によりよと一度はこの目に確かめおかん
近鉄の奈良駅からは数分の奈良女子大へひとり訪ねん

西堤啓子

赤橙黄緑青藍紫

・天

はねながら川下りゆく小さき魚 光を散らし踊る素粒子
もの憂げな午後のソファにあの人の忘れていった帽子が眠る
窓をあければウンブリアの朝まぶしくて重ねた腕も露を帯びてた
二人して橋を数えた迷い道 冬ベネチアの遠い靴音
病は君を変えてしまった 街ゆけば今も変わらぬロフトの黄色
戦争はある日突然始まると パンダがいて青かった芝生
空にある赤橙黄緑青藍紫 雨霽れて朝の光の描く多様性

萩葉子

マロニエ

・銀

子供たちの声きこえる四時すぎてマロニエの樹に二期はじまる
出勤の娘を見送りで車待つデイサービス週の週がはじまる
娘と共にのびほうだいのローズマリー剪定するとき中指傷付く
背の空が寒そうなりき陽の照りに散歩したいな私のわたし
やや黄ばみマロニエの葉の霜月は子供たちの声高くしている
重ね着に更に一枚プラスして玄関で待つデイサービス朝
雨ふりて子供たちの声きこえないマロニエの葉うなだれている

浜谷久子

言葉

・地

四片の花一人を偲ぶ会となりまだ温かい記憶を語らう
骨太に丁寧に生きて隣人は足早に逝く家族と呼ぶ人
目の前のものをさがして日が暮れる1×2の時間の不確か
休止符を打ちつつ歩む道すがら新たな出会いの芽吹きふつつ
共にした時間の証と一二五首製本急ぎ贈る一冊
不器用に生きている人の真っ直ぐを尊く見守る一人でありたい
言い返さぬ言葉のあること語られぬ言葉のあること心澄ませる

檜垣美保子

雨脚

・昂

電線の上の鴉がカッと鳴くポストに速達落とす間際に
ひさびさに雨脚見ゆるほどに降る八手の葉っぱに打ちつけている
逆さまに干されへなへなちよこのビニールプールに雨水溜まる
頼みごとするときいつも壮ちゃんを促音便にて「そっちゃん」と呼ぶ
好ましき誤解も微妙なずれもあり昔の女生徒五人のメール
五人いて四人は癌のサバイバー花見の宴を約し別るる
珈琲を飲んだ今夜は消え去っていつか誰かの記憶に灯れ

福田庸子

再生二期作

・今

川霧をまとひし墓によりそへり早朝の寺おもかげの父母
木の香り三味の音色の木場を恋ふ九十一歳江戸つ子の師は
山住みの枝折り戸に来てゆるき歩のナナフシと会ふ晩夏の朝
土の虫ケラが齧れる穴あきの馬鈴薯大事にコロッケとなす
すべりひゅ・こにしきさうの這ふ土に胡瓜負けるな蔓を伸ばせよ
薄き実を保つ背丈の低きまま再生二期作晩秋に育つ
増産を減反に変ふ新政権猫の目行政続く予感す

藤田美智子

火男

・新

白玉の歯にしみとほる秋の夜の(へよこやま)に岩壁の潮騒を聴く
鏡に知る顔と違へるわが顔の映るリモート画面を見つむ
濃紫の朝顔ひとつ咲き残る告げたきことのある口見せて
月明かりのさしくる床にひをとこの面をはづして君は眠れり
ずいふんと遠くへ行きてしまひしか三回忌の読経泣かずに聞きぬ
朝の冷気に水の緊まりてあるならむ川幅はつかに狭まりて見ゆ
われら白組に数ふる球のもうあらず負くるといふを知りし秋の日

藤森巳行

ガン告知

・銀

ガン告知聞いて優しくなりにけり子供に孫に特に女房に
ガンと聞き孫が悲しい顔をする今日か明日に死ぬわけではない
夏瘦せか恋煩ひか生活苦 全然違つた脾臓ガンとは
ガン告知笑ひ飛ばして生きてゆく人間誰でも一度は死ぬさ
糖尿に高血圧に脾臓ガン一病増えて三病息災
健陀多ほど極悪非道はしてないが地獄極楽まだ行きたくはなし
後五年生きると決めて祈るなり絶対勝利の人生目指し

本元由美子

母の故郷

・岡

母の故郷砺波平野の散居村遠き昔の母の物語
その昔母は語りき富山では冬の登校二階の窓ゆと
高岡の御車山の華やきて母の顔ちくる北陸の旅
義経が雨晴れを待ちし海岸に立山連峰はいづこと探す
六月の雨晴海岸に立山は霧に隠れて遠き彼方へ
道宗と連如の堅き信頼が厳かなる堂に今 凜とあり
陽だまりに吸りてをるははつかなる老いの幸せかたみに語りて

久我田 鶴子

コタツノドレイ

・羊

わが言へるコタツノドレイ知る人は「あれか」の顔す戸惑ひつつも
 輪の外に置かれしとき表情のいくたりかゝるてコタツノドレイ
 さまよへる脳に炬燵と奴隷とをちやつかせつつ過ぐる幾時
 言ふたびに炬燵の奴隷となりてゆく冬に籠もれる不精者頭ち
 辰年の小さな土鈴それこそがコタツノドレイ振れば音する
 大小のサイズの違ひあればこそ小辰と呼ぶる色はさまざま
 わが言へるコタツノドレイの意味を知り「なあんだ」といふ顔二つ三つ

● 歌書紹介 ●

・川野里子対話集『短歌って何?と訊いてみた』

本阿弥書店 二七五〇円(税込)

・依万智著『生きる『葉』』

新潮社 一〇三四円(税込)

・瀬戸夏子著『をとめよ素晴らしき人生を得よ』

副題に「女人短歌のレジスタンス」

柏書房 二〇九〇円(税込)

※「歌壇月旦」(執筆:檜垣美保子・西堤啓子)でも紹介された三冊です。

第35回実務委員会報告

十月二十八日(火)十一時より、本社において実務委員会を行いました。司会進行は、藤森巳行。総務部報告(藤森巳行)・令和七年度中間決算報告(大浪美雪)・編集部報告(久我田鶴子)・第72回地中海全国大会について(関根和美)。討議事項:①地中海規約の変更について②役員は今期満了につき改選の件③今後の全国大会開催について④会計赤字の件⑤本社の維持存続の件⑥その他。出席者は、久我田鶴子・関根和美・磯田ひさ子・田土成彦・高尾恭子・玉井綾子・檜垣美保子・藤田美智子・西堤啓子・滝田靖子・藤森巳行・永塚節子・大浪美雪・泉嘉穂子・阿藤たつる・牧雄彦・三好聖三の十七名。

①令和七年度の会計収支は想定内の赤字で収まっていますが、各支社・グループで引き続き会員を増やす努力をお願いします。

②会員の減少とともに、解散したグループもあり、組織のあり方をシンプルにしようということで、一部規約の変更をします。

③次の全国大会(第72回)は、東京開催。この一月号からご案内を掲載しています。その次の全国大会は、令和九年五月に福島県郡山市での開催予定。開催の仕方については、担当者の負担をできるだけ軽減できるよう、その方法を探っています。

④本社は、地中海の運営・編集作業等にとって欠かせないものであり、会員の拠り所でもあります。これまでの繰越金を切り崩しつつもなんとか維持していく方向で意見がまとまりました。また、会員の皆様の協力を得て、本社維持基金を募るという案も出されています。

【地中海社】

今日の二人

小さな幸せ

大録 麗子

唐突に肩骨折のその刹那愛猫の目につぶさに見られ

腕かばいゴミ拾う吾を氣遣いて「ゆっくりね」という障害の娘は

痛み引けと願う心の届きしか薬の効き目のありがたきかな

骨折りて肩いたわりつつ脱ぎ着する脱ぐは「健」から着るは「患」から

いつか来る必ず来るのねこんな日は娘に頼りたる洗髪清やか

秋立ちてツーリングの支度忙しく夫は朝から自転車磨く

九十歳を超えて自立の日を願い自に課す歩行日に七千歩

障害の子を持つ親も老い來たり想い語り合う子らの行く末

八女産のミディトマト届きたり覆える新聞読みつつ食みぬ

シクラメン樹下に置きたる去年の株一つ咲きおり初日映して

大ホール震わす程の大合唱「小さなしあわせ」歌うしあわせ

伸びやかに八丁堰の鴨らかな千余の白鳥旅立ちしあと

手、肩の骨折乗り越え残生は天寿目に据え旅などとして

切磋琢磨して

東庄町短歌会に指導者として着任された三浦好博先生に、私の自前の歌集を見ていただき、「地中海」にお誘い頂いたのは二年前のことです。恐れ多くて躊躇したまま時が過ぎ、仲間とともに入会を決心したのは数か月前でした。ですので、今回「今日の二人」に投稿を、とのお話はまさに青天の霹靂で、近頃こんなに驚き、また感激したことはありませんでした。

東庄町は、短歌の町として知られ、古今伝授で名高い東常緑とは深い縁のある町です。その歴史を守り育てようと、先輩から勉強会に誘われたのは八年前でした。子を取引斜陽の家業を守りつつ、短歌に救われたと四十余年にわたり詠み続けられた方や、歌を歌うために生まれてきたような方もおりました。

私の作歌に火がついたのは、ダウン症の娘をうたった拙い歌をほめてくださった先輩がいたからです。三十一文字で思いを表現できたときの達成感は格別ですね。勉強会では先輩方が亡きあとも細々と続けております。短歌で知り合ったかけがえのない仲間と、これからも切磋琢磨しつつ楽しみながら作歌して参りたいと思っています。